

絶望の裁判所

瀬木 比呂志

1954年名古屋出身旭ヶ丘高校、東大法学部

瀬木君とは慶応入学当時まだ学生運動の余波で入学式なしという状態の中で上級公務員試験を受けるといっていた私に高校のクラスメートの東大法学部現役組達が公務員試験の作成委員の教授の授業を聞きつつ勉強会をやってくれたときにクラスメートの1人が照会してくれたのが瀬木君だった。連れてきたクラスメートも学者志望で瀬木君も当然大学に残るだろうとだれもおもっていた。裁判官になったのは一種の驚きとともに学者以外ではまあこんなものだろうととらえられていた。少なくとも彼の性格から考えて庶民としては安心。でも所詮役所だから（この感覚が本人にはないのでこの本がでたのではないかと思う。）と一抹の不安を感じたものである。その後ボツ交渉だったので絶望の裁判所がでたときは驚いたというのが本当のところだった。最初に連絡してきたのが検事正をやっていたクラスメートだった。彼もまた瀬木君ほどではないが検事正でありながら検察庁の判断に正面から意見を言う人間であった。彼をもってしても裁判所がよくいままで瀬木君をまもってくれたという感想であった。逆言い方をするといよいよ長いものには一切巻かれない良識派を自他ともに認める人間はすめなくなったのかというのが本音である。ちなみに高校の同期で最高裁判事になった友人は我々と同じく常識派である。本人自ら退官していればそうだよねよく30年あまり我慢したよね（裁判所が）本人もがんばったよねでおわるところがこの本を読むと彼の慟哭ともいえる悲しみとやめさせられた怒りを感じざるおえなかった。ところがその後現在農相で石破派の齋藤研健衆議院議員の転落の歴史に何をみるか を読んだところ日本の社会組織自体に問題がおこっているのではないかと感じるようになった。最近話題の日大事件が典型例かもしれない。多分内田監督は法や倫理観より自分の命令を優先するというよりも全てに超越して監督の命令を実行する人づくりをめざして今回の時件をひきおこしたのではないかと考えている。お互いになぐりあわせる、無防備の人間をけがさせるまるで戦時中の帝国陸軍の精神統制方法である。人の考え方の幅を狭くし最後は一つの考え方しか許されないそういう社会の到来を警鐘しているのがこれらの本のように感じた。齋藤議員は通産官僚を辞し一度は落選しながらも民主国家たる日本を守ろうという思いで議院に転出した。しかし我々一般国民は国会や各レベルの行政機関、各種法人に注意をはらっていけばおのずと監視の目をむけることで商業主義のマスコミも眼をむけ、日大理事長暴力団幹部との交際時件のようにだまってときがたてば大丈夫ということもなくなるのではないだろうか。